自分でわが首ばしむるごたるこつば だりがするもんか！

とある職場の話

A――G会議（グループ会議のこと）は、時間外手当はつかんげなじゃっかん

B――牛乳一本と茶菓子だけたん。そしていうこつは、会社のこつばっかり。「汚れとっと感じン悪かけん、きれいにしましょう。きれいになっと、楽しゅう仕事のできゅうが」ていうて、整理整とんから器具の手入れのこつ。近ごろは灰皿まで洗わするこつなった。

係員は「ムダとか、欠陥のなかごつせれ」ていうて、そん目標ばグループごとに提案さする。そして目標達成のできんじゃったときは「お前たち自身がきめたっじゃけん、守らんなら」ていうて、おれたちの責任にしてきよるばん。え、会社ン腹ん中はちゃーんとわかっとる。

A――いまは、目標提案でん、わかりきった保安問題なんかば出させよるばってん、しかし、保安提案は提案さするばっかりで、第一会社自身が守らんめエが。それで、ケガ人や死人のとおしイ出るとたい。

この保安提案が進んでゆくと、内容が変っていって、作業重点にしぼられてくるとたん。もともとの目的が生産性向上運動だし、会社も正直に「経済競争に勝つため」ていいよる。またそこまでいかんど、会社の政策としては無意味じゃん。

つまり率直にいうと「もっと仕事をして、生産ば上げれ」ていうこつたん。それも、労働者自身に目標ばきめさせて……。

B――せエんかバカんごたるこつば、だりがするかん。まるで自分で自分の首ばしむるごたるこっじゃなっかん。

これはある職場での話。会社は終戦以来赤字赤字というて、賃金はスズメの涙ほどしか上げてくれず、それでいて会社は、どしどし設備を拡張している。

それでも三池闘争前までは事故も少なく、要求も、いえば通ったものだ。それが今はどうか？

みんなもういっぺん、生産性向上運動について真剣に考えよう。

×

港務指導部第二坑場分会の新聞〝きかんしゃ〟から。

今後の闘いに自信

四山旧友を迎えて交流

去る十月五日、一身上の都合で退職した仲間が再びヤマを訪ずれたので、昔共に闘った私たち（四山坑場三分会、掘進）は北原国之さん（大島一分会四棟）の家で、久方ぶりに交流を深めた。

その人は、三池離職後横浜市戸塚で働いてきている山田末男さんである。

今回所用のため来山するので、昔の仲間と語り合いたいという知らせを受けた北原さんは、同じ五人組の堀前さん、江藤さんと手分けして、同職種の組合員の家を一軒一軒連絡して回り、都合で出席できなかった三名を除き、三番上がりの朝七時という条件にもかかわらず、けい肺打ち切り者を含め全員が出席し、現在三池で働いている人たちは三池の現状を話し、山田さんはヤマを離れてから今日までの苦労を、共に語り合い、交流を深めた。

山田さんも他の人たちと同じく職場を四回もかわって苦労したとのことで、三池を離れてからも組合活動をつづけていること、守る会に加入したが何の手違いからか「みいけ」も送て来ず、さびしい思いをしており、外の人に加入呼びかけがしにくいこと等々、話しはつきなかった。

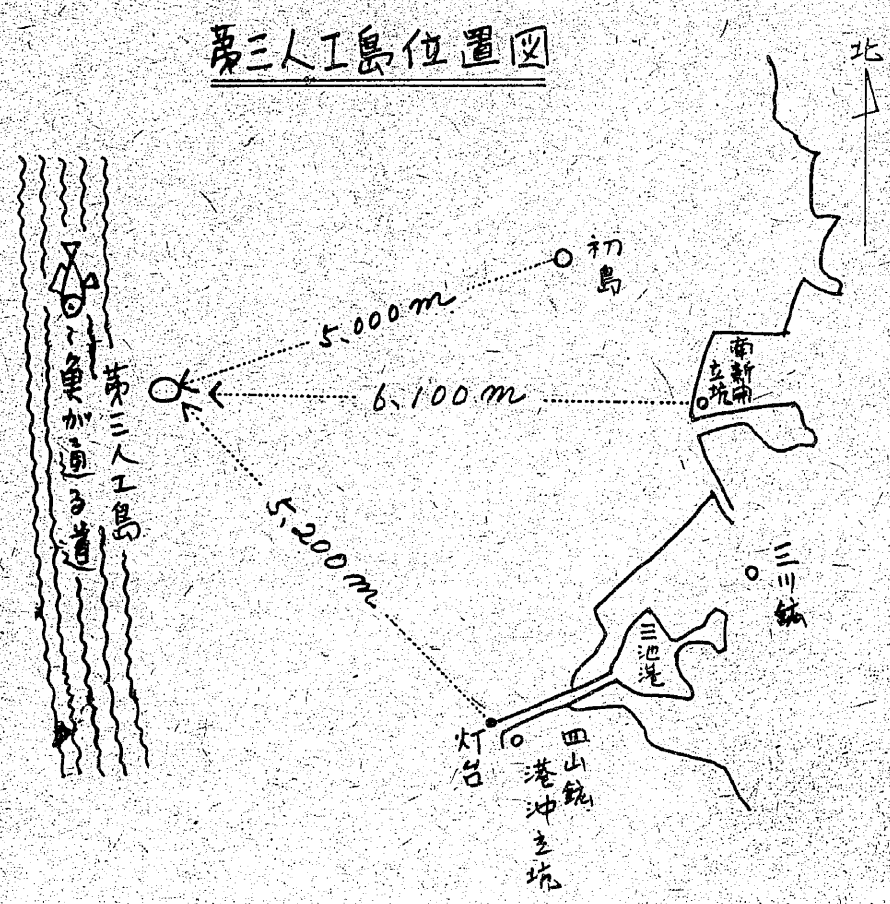
ともあれ三池を離れても、「運動」を「三池」を忘れない仲間の暖い血のつながりの深さを、お互いにしみじみと感じ合った一日であり、私たちは今後の闘いに自信を深めることができた。

「自宅待機を撤回せよ！」

新日窒の闘い続く

新日窒労組は、問題となっている首切りを、市の要請書にもとずいて撤回すれば、配置転換には応じようとの態度をとったところが会社側はそれをよいことに、首切りに通ずる攻撃の新手をもち出してきた。「首切りはしないが、半年間自宅待機をしてもらう。その間賃金の六〇％を支払う」というのがそれで、相互にハンコをついた要請書にはありもしなかったことで、職場ではバカにするにもほどがある、と憤っている。

自宅待機をさせておいて、一人ひとりにおもむろに圧力をかけてたたき落そうとの見えすいたくらみにきまっているが、新日窒労組は自宅待機を撤回させるために第二組合員にもよびかけて闘っている。



問題化した〝第三人工島〟

この横暴許されるか

漁民「漁場を守れ」と決起

いま大牟田市政の中で、三井鉱山が建設しようと目指している第三人口島の埋立工事のことが、重大問題化している。

第三人口島建設予定地点は、初島から西方に五千メートル、南新開竪坑から六千百メートル、また港沖竪坑から五千二百メートルのところで、もちろん建設目的は、「三池炭鉱の坑内の空気をよくし保安をよくするための入気坑」とされているもの。

三井、一切無視して埋立へ

三井鉱山はすでに早く、「第三人口島を構築したいので、公有水面埋立を許可してほしい」と県へ申請、県からは大牟田市に対し去る八月「地元の意向」の問い合わせがあった。それにもとずき田中市長は同月二十日に、当然ながら答申を求めて市議会に諮問した。

ところがあきれたことには、当の三井鉱山は、県の許可どころか大牟田市から県への答申もまだ出ない、去る七月中旬から、一切を無視していち早く埋立工事を開始している。

はからずも同地点は、魚貝類の豊庫という。例の筑後川の水が南へ向って流れる海域だから、集まる魚貝族が多く、とりわけ柳川の沖ノ端の漁民にとっては、ボラやススキ、その他の大切な漁場であり、大牟田の早米ケ浦の漁民にとっては、かえ難きタイラギの生棲所である。その漁場が奪われるとすれば、漁民の生活権そのものを奪うことにも通じている事実を思えば、まさに大問題といわなければならない。

バカにするなと、漁民立つ

ところが、福岡県有明漁協連合会（吉田広江会長）を握っている漁協の幹部らは、かほどの重大問題について漁民の了解を得ることもせず、すでに六月三井鉱山との間に、勝手に同意書を取り交してしまった。それも、各関係漁民に対し、たった三万円ばかりの補償金だという。「福岡市でのこのような埋め立てが行なわれたときには、一戸に一千三百万円もの補償が支払われているくらいなのに、バカにするにもほどがある。こんなもので、生活を売り渡すことができるか」と、漁民の間から怒りの声がわきあがり、ついには大牟田市議会に対する人工島建設地点を変更せよ、完全補償を行なえの要求にもとずく陳情となったものである。しかも立ち上がった漁民の中には、六月に三井鉱山との間にハンコをついた一組合長も含まれている。「あんな協定はまったくやぶれかぶれだった。平等な立場での話し合いによったものではなく押しつけられたものだった」と、その組合長は述懐していると。

坑内保安が大事とはいえ…

もともと第三人口島の完成予定は四年も先のこと。それを市長や与党の議会勢力は「坑内労働者の命にかかわる問題だ」として、緊急に結論を出すために狂奔しているが、社会党をはじめとする野党の、漁民の正しい要求にもとずく行動が、さいわい今日まで阻止してきた。もちろん「坑内保安の確保」という重大な意義をもつこの人工島構築が必要なこと論をまつまでもないが、漁民の意志も問わず、問題にもならぬ補償を押しつけようとする上に、議会内の保守勢力を使って、しかも県の許可どころか大牟田市の答申もまだ出ていないうちから、早くも埋め立てを開始するという傍若無人ぶりは許すことのできないことである。

この問題は、三井独占資本がいよいよ大牟田全市民の敵であることを、すっかりさらけ出してくれた。私たちはいっそう自信をもって、三井に対する責任追及の闘いを強めるべきである。

組合員・家族の皆さん、いよいよ一一・九が迫ってきました。この際一人でも多くCO患者守る会加入者をふやすため、がんばりましょう!!

子供達への約束

果しに三池へ

東京練馬区　清水真邦さん

拝啓、朝夕めっきり冷え込むようになって参りましたが、組合員ご一同様いかがおすごしでしょうか。

只今私たちの法政大学では封鎖が続いておりまして、社青同も非力ながら闘争に参加しているわけですが、闘争が長期にわたり、学生が登校して来ることもなく、反代々木のペースで運動がすすめられておりますが、われわれの大衆的闘争路線がなかなか組めなくて、苦しい活動が続いています。

ところで去る八月、貴労組の夏季児童対策には、三池労組・主婦会の活動になんらかの助力をしたいと思い参加しましたが、いろいろとお世話をしていただき誠にありがとうございました。

私は先般よりいろいろと、三池の話は聞かされて参ったのですが、実際にこの目で組合・主婦会の方々の活動を拝見し、いままさらながら感心致しました。と同時に、私たちが指導している学生運動をも含め、学生運動の甘さというものをつくづく感じました。

私ももう四年ですから、来年からはどこかの組合に入って労働運動をやろうと思っているわけですが、いままでのような軽々しい気持では、運動はやってゆけないぞということを、三池を見て感じました。私自身にとっても、運動の面以外でも勉強になるところが多くありました。

それから今年の暮れに、もう一度三池に寄せていただきたいと思っております。子供たちに約束しておりますし、私自身これから労働運動を経験するに当って、もっと三池から学びたいと思っているからです。

これから七〇年反安保闘争を目前にして、資本の攻撃が一層きびしくなり、苦しい闘いが続くと思いますが、私自身も社青同の一同盟員として、皆様と共に闘ってゆく決意であります。

三池労組・三池主婦会の一層の発展を祈ってやみません。

×

右の便りは、ついこのごろ安達宮浦指導部長に寄せられてきたもので、清水真邦さんは現在法政大学在学中。

なおほかに、夏季児童対策に参加していただいた渡辺美千代さん（市内天領町二丁目）や浜本隆さん（福岡市友泉亭九三九の五）からも、連帯のお便りを頂きました。